

「さくら志津憲法9条をまもりたい会」に参加して

残暑もやわらいで

8月27日（日）、午後2時30分より志津コミュニティセンター（佐倉市）で「さくら志津憲法9条をまもりたい会」主催の「戦争体験・憲法と私」と題した集いが開催された。参加者は45名で、予想を上回った。共同代表の一人が高塚一成さん、近くに住む絵描きさんで、地域でも教えている。開会の挨拶は会のなり立ちにさかのぼり、顔の見える範囲で、肩書き抜き、幅広い発想ながら、何としても憲法九条は守りたい、の気持ちで集まったことが強調された。会の命名にもあらわれていよう。

私に何ができるのか

私も自治会役員時代の友人に誘われて世話人の一人になったのが2006年6月。内野光子の名前で参加、地域デビューでもある。世話人会はほぼ欠席することなく参加したが、仕事を持つ人が皆勤というのは難しいだろう。手伝えることはやってみよう、というつもりであった。まず、ニュースの作成、そしてブログの立ち上げ、イベントの計画……。集まった世話人の中で、メールやインターネットができる人が意外と少なかったのだ。広報的なところを担当することになって、ニュースの編集は若い人にやってもらおうとして、打ち込みは手伝いますよ、ブログも夫に手伝ってもらえばできますよ、と。イベントは、ひとまず、アイデア持ち寄り、プログラムのようことになった。どこからか人を呼んでということではなくて、地域の人たちの参加で盛り上げようということになったのである。

ニュースの第1号は、会のブログで読んでもらうことにしよう。そのブログも、2週間に1度くらいは必ず更新した方がよいということで、そのネタを探す。どのくらいの人たちがアクセスしてくれているのか、「九条の会」のメルマガに登録し、立ち上げとイベントの記事掲載後は若干増えている。

戦争体験の重さと衝撃

集いの前半、地元3人の戦争体験者のお話は重く、衝撃的であった。撃沈した輸送船から投げ出され、日本兵の遺骸からはなるべくしっかりした軍服や塩・コメなどを剥いで生き延び、捕虜となって食したサンドイッチのうまさに米軍の強さを思い知ったという鶴野さん。敗戦後、東北の農家から北海道の炭鉱の町に嫁ぎの朝鮮戦争特需と休戦による首切りなどとの苦難を乗り越えてきた高橋さん。終戦の詔勅も「いよいよ決戦だ」と思って聞いたが、兄弟四人が無事帰還した一家は、多くの戦死者を出した村の中では肩身が狭かったという古屋さんは、孫子を戦場に送らないために憲法9条を守りたい、と結んだ。

憲法9条の危機に

後半のリレートークでは、パワーポイントを利用して、障害者を生み出す最大の原因であった戦争、障害者の暮らしをさらに劣悪に迫りやる戦争について解説する通所施設を運営する奥山さん。地元選出の県議会議員大野さんからは、千葉県における憲法九条をめぐる危機的な状況についての報告。内房の富浦での自衛隊・小学校を巻き込んだ、「防災訓練」の実施も報告された。二人の話は、現実に即した分かりやすい話であった。

会場からは、「19歳の息子を見ていると、もし徴兵や徴用に直面したら逃げ出すにちがいないと思うけれど、当時の青年たちはどうして素直に従ったのか」の質問に、時代の流れとその流れを作り出した教育の恐ろしさが語られた。また、家族にも話せなかったという中国兵への殺害行為を患者さんから告白された元看護師の体験談には胸に迫るものがありました。佐倉の歴史を研究する山倉洋和さんからは、郷土の歴史にこだわりながら憲法9条にかかわりたいとした閉会の挨拶があった。

手作りの会ながら、多くの参加者は、中身の濃い集いになったことを喜んでくれたようだ。近くのケーキセットが自慢の店での2次会にも17人が集まった。これからも幅広い活動に期待したい。

戦争体験・憲法と私 プログラム (2006. 8. 27)

(全体司会 内野光子)

2:30 開会の挨拶: (共同代表) 高塚一成さん

戦争体験を語る: 鶴野龍一さん (聞き手 中河幸)

高橋つやさん

古屋喜門さん

朗読: 朝澤玲子さん: 星野富弘著「風の旅」より

稲葉トヨ子さん:

赤羽礼子著「第7章アリランの歌声」

『ホテル帰る』より

—休憩 (5分) —

3:40~ リレートーク: 奥山直廣さん: 障害者と戦争・憲法について

大野博美さん: 千葉県議会における憲法問題の動向

4:00~ 参加者の自由トーク (司会 伊藤繁子)

4:30~ 記帳・カンパのお願い・懇親会のお誘い (向山尚子)

4:35 閉会の挨拶: 山倉洋和さん